

Rules of the Road

by Su Friedrich

The Japanese translation

Copyright © 1993 by Su Friedrich

///

HIDE&SEEK-1 RULES OF THE ROAD

彼女は貿易の仕事をしていた
新しい仕事の度に、大荷物で出張を
車なしで不便だけど、買う方が大変で
どうにもならない時、彼女は兄に助けを
この時もー
彼女が頼むと、すぐ快く車を貸してくれた
毎年 感謝祭の帰省はー、, サンクスギビング, 27
兄とそのガールフレンドと、3人で
彼女はいつも一人だった、兄が戸惑うからと、 . . . , 58
11月に入り 私もー、と頼んではみたけど
やはり彼女は自分だけ、帰省してしまった
数日後彼女から電話が
ずっと中古車を見て回り、ついに気に入った車をー
買ってもらったと
思わず笑ってしまった、彼女は嬉しそうにー
ページのステーションワゴン、に乗って帰ってきた
上には荷台、サイドに木目のパネルのついた
83年型のオールズモビル社製、実用的な家族車だった、,, ファミリー・カー, 41

彼女は後満悦、でも保険や整備といった出費が
私は 一人で車を持つ自信は、なかったし
彼女の助けにもなるからと
維持費を半分出すことにした
でも名義は彼女で、彼女が優先して車を使った
これには私も文句を
だって彼女が車を使うのは、仕事で街を離れる時ばかり
彼女が行ってしまうのは、辛かった
車は自由に使えたけど
昔からマンハッタンへ行くのに、地下鉄や自転車を使っていた私
すぐに車の快適さを、知ってしまった

最初は笑ったけど
古くてダサいわりには、A Tでパワーステアリング
いいラジオにV 8エンジン
機械に疎い私でも、その加速のすごさは実感した
実は彼女は速いのが、好きではなくて
だから彼女を乗せる時は、いつも我慢した
でも私一人のときは、青信号で急発進を
隣車線がエンジン噴かしてる、若い男だったりすると特に
こんなどんくさい車となんか、と思うだろうけど
実際 見た目は、のろそうな感じだった
離ればなんとか見られる、外側はー
実は安っぽい紙で、もうぼろぼろ

それとラジオの選局と

私も何もー

言えなかった言葉たちの他には、何も

別れる3ヶ月前ー

喫煙歴19年 一日一箱は、煙草を吸っていた私は

禁煙を決意していた

彼女も禁煙したことが、あったけど 結局三日坊主

別れても 私は、彼女の健康が心配で

毎回、まず灰皿を空に

そして真冬でも、窓を全開にして運転を

彼女が乗る時、いい香りがしているようにと

少しは効くかと思ったけどー

私の知る限り、作戦は失敗だった

車も必要だったし、彼女との接点も欲しかった

でも結局、それはあまりに辛くて

私は仕事の出張で、3週間 街を離れー

そのまま、戻っても連絡しなかった

彼女がどう思ったかは、わからないけど

最後に車を渡してから、もう数ヶ月経つ

彼女の声を聞いたのも、それが最後

地味だけど、それも面白いと思った

私の周りであんな車に、乗りたがる人はいなかったから

だから あの車が街に、あんなにも溢れているとは

それまで、存在にも気付かなかったのに

世の中、ステーションワゴンだらけ

そのうちの一台を所有する彼女

まるで何かの一族に、入ったかのようで

私も ファミリーの一員に、なったような気分だった

今も、街中のワゴンの一台は彼女で

いつかすれ違うかもしれない

恋人と海へ？

それとも仕事帰り

近所へ買い物途中かも

それに 私がいどこに借りた、車に乗っていて

朝の渋滞で隣同士に、なってしまうー

なんていうこともあり得る

きっと私は見ない振りを

抑え切れずに、泣き出してしまうかも

彼女を横目で、観察するかもしれないし

手を振って微笑んだ後ー

締め切った車内で、彼女を罵るかも

だからあの車を見ないようにと

でもどこに行っても、走っていた

こちらに向かってきたり、ただ停まっているだけでも

私は凍りついた

彼女にそんな安らぎを、与えたくて
彼女が運転する時
私は 地図で変な名前の街を、探したり
音楽をかけたり
ダッシュボードに足を乗せて、彼女を撫でていたりした
車があればまたどこかへ行ける、思い出も増えていった

でも 苦い思い出も
林やビルの間を走り、ながらの大喧嘩
大抵は 週末に予定を、詰め過ぎた結果で
時には激しい、意見の対立もあったしー
家での喧嘩の続きだったことも
車での喧嘩は危険が伴う
私がハンドルを握っている時は、とにかくスピードを
道路や道順も少しは考えるけど
無事に家に帰り着くまで、自分を抑えるのに必死
時には 渋滞に巻き込まれて、ぶすっとしたまま何時間も
あまりに危険な時は車を止める
休戦に持ち込まないと、出発できない
駐車場で窓を閉めきりー
人々が車から降りて、トイレに向かうのを眺めながら
皆は喧嘩したらどうやって、やりすごすのかと考えた
時が経つに連れ、喧嘩の跡ばかりが増え
あの布の座席もー,,シート,44
二人が吸い続けた煙草のせいで、悪臭を放つようになっていた

とうとう本物の別れが、やってきて
彼女は、「車の共有は続けよう」と
私はそれまでつぎこんだ、金額の分 権利を主張して
実は 繋がりを持ち続けられると思ったのかも、つな,27
車のことで連絡をすれば、そこから会話が
私はそうしたかった、彼女の声が好きだったから
二度とその声が聞けないなんて、耐えられなかった
初めのうちは、よくやっていたと思う
彼女が仕事で街を空ける間、私が車を使った
彼女が戻る直前に、近くに車を止め
留守電にその場所を
そしてまた彼女から、次の連絡がくる
そんなふうにお互い気を使っていた
彼女はこの車で、どこへ行ったのだろうか？
時々 エンジンをかけると、音の洪水が
彼女が聴いていたラジオ
私は 想像するー
昼下がりに、一人 車を走らせる彼女
あるいは夜更け、隣に女を乗せて部屋へ帰る彼女
片手でハンドルを握り、もう片方の手で煙草に火を…
彼女は何の跡も残さなかった、空のコップが落ちている程度,,から,10

それとラジオの選局と

私も何もー

言えなかった言葉たちの他には、何も

別れる3ヶ月前ー

喫煙歴19年 一日一箱は、煙草を吸っていた私は

禁煙を決意していた

彼女も禁煙したことが、あったけど 結局三日坊主

別れても 私は、彼女の健康が心配で

毎回、まず灰皿を空に

そして真冬でも、窓を全開にして運転を

彼女が乗る時、いい香りがしているようにと

少しは効くかと思ったけどー

私の知る限り、作戦は失敗だった

車も必要だったし、彼女との接点も欲しかった

でも結局、それはあまりに辛くて

私は仕事の出張で、3週間 街を離れー

そのまま、戻っても連絡しなかった

彼女がどう思ったかは、わからないけど

最後に車を渡してから、もう数ヶ月経つ

彼女の声を聞いたのも、それが最後

地味だけど、それも面白いと思った

私の周りであんな車に、乗りたがる人はいなかったから

だから あの車が街に、あんなにも溢れているとは

それまで、存在にも気付かなかったのに

世の中、ステーションワゴンだらけ

そのうちの一台を所有する彼女

まるで何かの一族に、入ったかのようで

私も ファミリーの一員に、なったような気分だった

今も、街中のワゴンの一台は彼女で

いつかすれ違うかもしれない

恋人と海へ？

それとも仕事帰り

近所へ買い物の途中かも

それに 私がいどこに借りた、車に乗っていて

朝の渋滞で隣同士に、なってしまうー

なんていうこともあり得る

きっと私は見ない振りを

抑え切れずに、泣き出してしまうかも

彼女を横目で、観察するかもしれないし

手を振って微笑んだ後ー

締め切った車内で、彼女を罵るかも

だからあの車を、見ないようにと

でもどこに行っても、走っていた

こちらに向かってきたり、ただ停まっているだけでも

私は凍りついた